

審査の結果の要旨

金井香里

本論文は、小学校のニューカマーの子どもに対する実践的な対応を教師の内的経験世界として描き出し、子どもに対して教師が付与する表象によるボーダー（境界線）の形成、子どもへの対処を思考する過程で教師が経験する葛藤、および、教師が実践的解決を模索する戦略を構想し実行する過程で派生する葛藤における教師の認知と思考の実態が探究されている。本論文は、この三つの課題領域に即して以下の三部で構成されている。

第一部では、教師が子どもの差異を表象する事態において教室にボーダーが形成される事態に着目し、そのボーダーによって文化的差異が不可視となり、意図せずして子どもを学びから排除する危険があることが、表象の政治学の理論によって提示される（第一章）。続いて三人の教師の事例にもとづき、子どもが流暢に日本語を話すようになると文化的背景が考慮されなくなること（ボーダーの置き換え）や、高い日本語能力によって文化的差異を克服したと認識されがちなこと（ボーダーの解消）が指摘される（第二章）。さらに二人の教師の事例にもとづき、子どもの国籍や生育地に関わる表象が考察され、日本人との同質性が強調される表象では子どもの逸脱行為や学習の困難が知能と家庭の問題として認識され、逆に子どもの異質性が強調される表象においても文化的アイデンティティの揺らぎや喪失が考慮されにくくなる事態が生じることが明らかにされている。

第二部は、ニューカマーの子どもへの対処の過程でつくりだす教師の物語が分析され、実践過程における教師の経験世界の葛藤が描出される。この考察にあたって、まず「履行すべき物語」と「生きられた秘密の物語」との相互作用の検討によって教師の葛藤を開示する方法が示され（第4章）、教師二人の事例が考察されている（第5章）。事例によれば、教師の子どもと親への配慮が、時に子どもの学びに対して意図せざる作用を及ぼし、子どもの学びの機会を逸する事態も生じていた。

第三部（第六章）は、教師が採用している葛藤の解決のため実践的な戦略を三人の事例に即して考察している。子どもの家庭学習や日本語の表現活動に解決策を求めた教師の場合も、他の子どもと良好な関係を築けない子どもへの対応を戦略として採用した教師の場合も、あるいは、教室の他の子どもとは異なる例外的対応で対処する戦略を用いた教師の場合も、教師は実践的な戦略の構築や採用において葛藤を経験し、対処の戦略自体が新たな葛藤を生成する事態が指摘されている。

本論文は、ニューカマーの子どもの教育が直面している問題を教師の側の問題として考察した最初の本格的な研究であり、教師の経験世界の葛藤を描出した点において独創的な研究である。特に、教師の表象と対処が意図せずして子どもの文化的差異を不可視にし無化する危険性を指摘した点、および、教師の実践的な対処が葛藤を複雑化する事態が生じるメカニズムを解明した点で重要な成果を収めている。よって、本論文は博士（教育学）の学位の水準に達しているものと評価された。